

## 鮑郎子神再考

吉田隆英

筆者は先年来、中国浄土教の始祖である北魏の僧、曇鸞（四七六―五四二）についていささか研究を進めているが、九十年代に入ってからからの日本における曇鸞研究にはかなり目ざましいものがあり、むしろ活況を呈しているときえ言える状況にある。そこでまず最初に曇鸞研究の現状について簡単に紹介しておきたい。

一九九〇年に邦訳が出版された、執筆当時には「山西新報」の記者であった宋沙蔭著の『浄土古刹玄中寺』<sup>1</sup>は、曇鸞が創建し、唐の道綽（五六二―六四五）が住し、後に善導（六一三―六八一）も参拝したと伝えられるその寺の歴史と現状について、地元ジャーナリストが丹念に調査した成果で、現地を訪れる機会のすくない我々にとって大いに参考となるものである。次にあげられるのは九五五年に刊行さ

れた藤堂恭俊著の『曇鸞』<sup>2</sup>で、全集中に収められていることもあって、分量としてはあまり多くはないが、最近の新説にも目を配りながら、曇鸞の思想と生涯とを手堅くしかも簡潔に整理して、今後の曇鸞研究の基礎となるに十分な快著であると言えよう。翌九六年には浄土真宗本願寺派教学研究所の、曇鸞の『往生論註』（『浄土論註』、以下『論註』）研究班によって構成された、論註研究会による『曇鸞の世界―往生論註の基礎的研究』<sup>3</sup>が出版された。本書は各分野からの論文を集めたものであるが、筆者も関係者のひとりであるので、その評価については後考をまきたい。更に九八年には稲垣久雄著訳の『往生論註（英訳）』<sup>4</sup>が刊行された。本書は『論註』の初の完全英訳本で、曇鸞の生涯と思想のみならず、インドと中国における浄土思想の展開をも概観し、詳細な注釈も付せられている好著で、曇鸞の事跡を広く世界に紹介するものとして、今後が大いに期待され

る。

以上はすべて単行本として出版されたものであるが、それ以外にも関西大学の藤善真澄教授は、近年曇鸞とその周辺について精力的に研究を進めておられ、従来疑問視されていた曇鸞の没年を確定させるとともに、その出自に関しても胡族か胡漢混血の身分の低い家柄の出身である可能性のたかいことを指摘されるなど、これまでの宗学研究の狭い枠を打破して、巨視的な視点から多くの創見を導き出されていることは刮目に値する。筆者もそうした先学の意欲的な諸研究に刺激を受けて、いくつかの小論を発表しているが、このたびの小稿も、筆者の一連の著作と伝記を中心とする曇鸞研究の一環をなす、基礎作業の試みのひとつである。

## 二

ここまでのわずかの研究の結果、筆者は曇鸞の数多い伝記の中で最も古いものである、唐の道宣(五九六—六六七)の編んだ『統高僧傳』義解篇所収の曇鸞伝の記述は、曇鸞の著作を道綽のものを取り違えるという大きな誤解はあるものの、全体としてきわめて信憑性のたかい、信頼すべき資料であることを確認し得たと考えている。

その『續高僧傳』中の曇鸞伝には、『大集經』の注釈作りだいじつに没頭した結果、いささか精神失調気味となった曇鸞が、健康回復のため当時流行していた不老長生の術を学ばんとして、梁の大通年中(五二七—五二九)に、南北のきびしい軍事対立の続く中を、首都建康(現、南京)に近い句容山(茅山)に隠棲していた、道教の大家で山中宰相と呼ばれて尊崇を集めていた陶隱居すなわち弘景(四五六—五三六)のもとを訪れて教えを受け、「仙經」十巻を授けられて帰途についたという記述がある。

それはともかくとして、本稿において問題としたいのはその後のことである。まず『續高僧傳』の原文を引く。

遷至浙江。有鮑郎子神者、一鼓涌浪、七日便止。正值波初、無由得度。鸞便往廟所、以情祈告、必如所謂、當爲起廟。須臾神即見形、狀如二十。來告鸞曰、若欲度者、明旦當得、願不食言。及至明晨、濤猶鼓怒、纒入船衰、怙然安靜。依期達帝、具述由緣。有敕爲江神、更起靈廟。

(曇鸞は)また浙江に至った。(その地には)鮑郎子神という神がおり、ひとたび波立つと大浪がわきあがり、七日たってようやく静まるというありさまであった。ちょうど波の立ちはじめに遭遇して、(水路を)渡るだけでがなくなってしまった。(曇鸞はそこで神のほこ

らに行き、「もし願いどおりにして(渡らせて)下さるなら、(神の)ために廟を建立いたします」と心をこめて祈願した。しばらくすると(鮑郎子)神が姿を現わした。その容貌は二十歳くらい(の若者)であった。そして(疊)鸞のもとに来ると、「もし渡りたいのであれば、明朝渡れよう。どうか約束をたがえることのないように」と述べた。翌朝になっても波はまだ高く激しかったが、船に乗るとようやく衰え、安らかにおさまつてゆき静かになった。(神との)約束どおり皇帝にその由来を言上すると、勅命が下つて(鮑郎子神を)江神として封じ、さらに靈廟が建立された。

要するに、句容山からの帰途、疊鸞は鮑郎子神と呼ばれていた地方神と遭遇し、その神助によって波浪にさまたげられることなく、無事に目的地に着くことができ、皇帝にことこの次第を申しあげて、神との約束を果たして廟が建立されたということなのであるが、いささか神異色の濃いこの挿話については、従来あまり検討をくわえられることもないまま、今日に至っていると言つても過言ではなからう。しかし、仏教学者であるとともに歴史学者でもあつた学僧道宣が、その特異な伝承を疊鸞伝中に収録しているのは、すくなくともこの話が浙江地方において、唐代初期にはかなり広く一般に流布しており、記録に値するものと彼自身が

認めたからであるともみなして異論はあるまい。

筆者は先ごろ発表した「鮑郎子神考——疊鸞と神異——」(以下前稿)において、鮑郎子神について若干の考察を試み、従来論じられていた諸説、すなわち鮑郎子神とは西晋時代の人物で「抱朴子」の著者として知られる葛洪(二八三—三四三)の岳父であつた鮑靚(鮑南海)であるという鮑靚説、及び「抱朴子」や「風俗通義」に記述のある、田中のあみにかかつたのろを見つけた通りがかりの人物が、代金がわりに鮑魚一匹を置いて立ち去つたのを、あみの持主が神のしわざと誤解して鮑君と呼んでそれをまつり、一時は流行神となつたが実情が判明した後にはすたれたという鮑君神説の二説を比較検討した上で、明末に編まれた顧祖禹の「讀史方輿紀要」に記述のある、現在の浙江省海塩県所在のかつて鮑郎市と呼ばれていたあたりにおいて、かなり以前にまつられていたと考えられる、東晋の隆安五年(四〇一)三月ころ、孫恩の反乱の際にその付近において戦死した、東晋の海塩令鮑陋の子、鮑嗣之こそが鮑郎子神であつたという結論に達した。

その鮑嗣之鮑郎子神説に対して、藤善真澄教授はこの程、南宋代に編まれた「嘉泰會稽志」祠廟に記述の見える、後漢時代の鄞邑の人、鮑蓋こそが鮑郎子神であろうとの新説を提唱された。そこでこの度の小稿においては、藤善教授

の説かれた鮑蓋説について改めて検証を試み、鮑郎子神とは一体どのような神で、何故に疊鸞との関係が生じたか等について、前稿で見落した部分をも補いつつ再度その真相をさぐり、疊鸞の生涯を考える上での参考に供したい。

## 三

藤善教授が鮑郎子神鮑蓋説において根拠とされた資料は、会稽の地方志の記述である。と言うのも、疊鸞南渡当時の南北分断期の海上交通を考えると、教授が説かれているように、常識的には海塩よりもそのあたりの中心城市であった会稽の方が、交通の要衝であったことは間違いないから。その上会稽は中国においても地方志刊行の盛んな文化水準のたかい土地柄であったことで知られており、この地で刊行された地方志は多数にのぼり、その意味で関係資料は決してすくなくない。それらのうち比較的古いものである、南宋の嘉泰年間（一一〇一—一一〇四）に編纂された『嘉泰會稽志』<sup>10</sup>には、

鮑郎廟在府南二里二百四步。

という記述があつて、その当時会稽府に鎮座していた鮑郎廟のおよその所在地を明らかにしてはいるものの、その祭神が誰であり、どのような理由でいつ頃からそこにまつら

れていたかについては一切述べられていない。

鮑郎廟とその祭神などについてより詳細であるのは、『嘉泰會稽志』より二十年あまり後の宝慶年間（一二二五—一二二七）に編まれた『寶慶會稽續志』<sup>11</sup>である。そこでいささか繁雑となるけれども、藤善教授がつとに指摘されたその記述を引いて、今一度検討をくわえることにしたい。

鮑郎廟、前志云鮑郎廟在府南二里二百四步、不言鮑郎爲何時人、及立廟之因。按輿地志、鮑郎名蓋、後漢鄞邑人、爲縣吏。縣嘗俾捧牒入京、留家酣飲、踰月不行。縣方詰責、已而得報章、果上達、審究實然。既死葬三十年、忽夢謂妻曰、吾當更生、盍開吾冢。妻疑不信、再夢如初。乃發棺、其尸儼然如生、第無氣息耳。冥器完潔、若日用者。冢之四傍、燈然不滅、膏亦不銷。郡人聚觀、咸神怪之、立祠以祀。自梁大通以來、靈應益著。廟初曰永泰王廟、崇寧二年豐稷奏永泰犯哲宗陵名、乞改爲靈應、詔如其請。……

鮑郎廟は前志（『嘉泰會稽志』）に、鮑郎廟は（会稽）府の南二里二百四步のところにある、と述べるものの、鮑郎がいつ頃の人であるとか廟が建立された理由については何も言っていない。『輿地志』を調べてみると、鮑郎は名を蓋といい、後漢時代の鄞邑（現、浙江省鄞県東部）の人で、県の下級役人であった。（ある時）県で

公文書を蓋に都（洛陽）へ提出のため派遣しようとしたが、自宅に留まつたまま酒を飲んでいて、一か月たつても一向に上京しようとしなかった。そこで県がその責任を追及しようとした矢先、（都から）返答の公文書が届き、（既に）中央に達しているらしいので詳しく調査してみるとそのとおりであった。そんなことがあつた後、死んで葬られて三十年の歳月を経たある時、蓋はにわかには妻の夢枕に立つて「私は再びよみがえる筈である。どうか私の墓を開けて欲しい」と言つた。妻は疑つて信じないでいると、また同じ夢を見たので、（墓を開いて）棺をあけてみると、その体はおごそかであたかも生きているかのようで、ただ呼吸をしていないだけであつた。陪葬された器物にも欠けたところはなく清潔で、まるでふだん使っているかのようであり、墓の四傍にはあかりが消えることなく燃えており、油も尽きてはいなかった。土地の人々は集まつてそのありさまを見、不思議なこととして祠を立てて（神として）まつた。梁の大通年間以来、靈応ますますあらわれた。廟はじめは永泰王廟と呼ばれたが、（北宋の）崇寧二年（一一〇三）（当時尚書の職に在つた）豊稷が、永泰の名は哲宗皇帝の陵名を犯すものであるとして、靈応と改めることを乞うたので、詔してその請にこた

えた。……

以上が会稽に伝えられていた鮑蓋についての伝承のあらましであるが、神としてまつられるようになったのが、没後三十年もの歳月が経過してからであり、民に善政をしいてその地域の人々から長く尊崇をあつめた清官という訳でもなく、きわめて凡庸な地方神であつたとみなしてよからう。しかし、梁の大通年間より靈応ますますあらわれたと述べられていることが注目され、しかもその年代はまさに曇鸞の江南遊学と時期的に一致するものである。だがこの神の靈力は一体どのような方面に作用したのであるうか。それに鮑蓋は生粹の会稽人ではなく、鄞邑という会稽からすれば周辺地域の出身であることが注意される。

ここで会稽すなわち現在の紹興についてすこし考えてみたい。<sup>16</sup> 銭塘江の東岸に位置するこの地は、今でこそ浙江省の省都を後発の杭州に譲つており、紹興酒と秋瑾や魯迅の旧跡以外にはあまり見るべきものとなない、単なる地方都市に見えるかもしれないが、実際には杭州よりも古くむしろ悠久の歴史を誇ると言つても過言ではない、紀元以前の昔からの江南を代表する中心的な都市であつた。その地にはつとに春秋時代末期に越の国都が置かれており、越王句踐の時代には大いに繁栄した模様である。秦の始皇帝による天下統一の後には会稽郡が置かれたが、それはこのあた

りでは最大の街であつたその地会稽にちなむものである。その後、隋代からは越州と呼ばれ、唐代には江南道、宋代には兩浙路に属して、江南の發展にしたがつて杭州とともに繁華を誇つた。北宋滅亡の後、杭州を行在(臨時首都)として南宋が建国されたが、その折に会稽は臨安(杭州)に万一のことがあつた場合、「宋を紹<sup>ぎ</sup>國を興す」という意味をこめて紹興と名を改められ、そのまま現在に至つてゐる。

— そのような次第で、会稽には曇鸞の時代にはまだ会稽郡が置かれていたが、錢塘郡の置かれていた現在の杭州と比較しても、あらゆる意味でなら遜色のない、むしろこちらの方がその当時は大都市であつたことは疑いない。そしてその温暖な氣候と、米や茶をはじめとする農産物や海産物、そして水にも恵まれた豊かな土地柄もあつて、その周辺一帯からは古来多くの学者、文人、政治家を輩出して今日に至つており、現在でも文化水準のたかいことで知られてゐる。それ故、首都を支えていた南宋の時代に、数多くの充実した地方志が編纂されたのも当然のことであつた。もつともその事實は紹興だけにとどまらず、現在の浙江省全域についても言えることなのではあるが。

先に引いた『嘉泰會稽志』及び『寶慶會稽續志』は、会稽すなわち当時の紹興府の府志である。そしてそこに述べられてゐる鮑郎廟あらため靈応廟の記述は、当然のことな

がら、その頃紹興府に存在した廟に關してのものである。しかし『寶慶會稽續志』にも述べられていたように、鮑蓋はもともと会稽の出身ではなく後漢時代の鄞邑の出身で、現在の地名で言えば会稽に隣接する寧波地区の人物である。そのいわば他所者の神様である鮑蓋の廟が何故に紹興府においてもまつられていたかについては、唐の開元年間(七一三—七四一)以前には、いまだ寧波には明州が置かれておらず、その頃鄞県は越州に所属していたので、越州にも廟が建立されたのであると伝えられているが、鮑郎神に対する信仰が次第に広まりつつあつたことのあかしであるとみなしてよからう。したがつて鮑郎廟についての詳細を知るためには、まずその神が一番最初にまつられたと考えられる、その神のいわば本質の地である、後の明州鄞県の記録を調査してみる必要があることは言うまでもない。

#### 四

明州<sup>16</sup>すなわち寧波はその市街の西方にある、日月星辰に光を通ずるといふ意味から、四明山と呼ばれた山々にもとづいてその名がつけられた。その山中には阿育王寺をはじめとして古刹が多く、また道教においても四明山を第九洞天と稱して尊重した。その意味で宗教的な雰囲気<sup>17</sup>に満ちた

地域である。そしてこの地もまた地方志編纂の盛んな土地であった。宋元時代に編まれた方志は合わせて十志に及び、うち四志はつとに散佚したものの、六志が現存しており、それらが総称して「四明六志」と呼ばれていることは周知のとおりである。

その四明六志の中で最も古いものが、南宋の乾道年間（一一六五—一一七三）に編まれた『乾道四明圖經』であり、その書の祠廟の項には靈応廟に関する記述が見える。ただしいささか分量が多いので、先に引用した『寶慶會稽續志』との重複部分については、残念ながら割愛することとする。

靈應廟即鮑郎祠也、舊云永泰王廟、在州南二里半。……  
梁大通間、有奴賊名益誕。唱誘羣盜、有衆三千、號奴抄。兵寇會稽、永嘉、臨海、海鹽、並海郡邑、咸被其害。官軍屢邀擊不勝、賊勢益張。定襄侯蕭祗爲刺史、神忽見形、因巫語。祗願助討賊。祗乃施帷帳、迎神置于譙門。形雖隱而言與人接。越三日告去、語祗曰、當以八月十三日破賊奴抄。果以是日至餘姚。船膠於江、衆陷於淖、潰潰如醉。官軍悉繫縛之、若拾遺然。祗奏其異、武帝遣增大祠宇、日以益盛。……  
靈応廟とはすなわち鮑郎祠である。もと永泰王廟といひ、明州府の南二里半の場所にあつた。……  
梁の大通年間に、益誕という名の匪賊がおり、群盜た

ちをそそのかして組織し、三千の兵力を集めて、奴抄と称し（て各地を荒らしまわり）、会稽、永嘉、臨海、海塩など海ぞいの諸県はみなその被害を受けた。官軍はたびたび迎え撃つたが勝つことができず、賊軍の勢いはますます盛んになった。定襄侯に封じられていた（皇族の）蕭祗は、（当時揚州）刺史に任ぜられていた。（そんなある時、鮑郎）神がにわか姿を現わし、みこにのり移つて話をした。祗は賊を討つことへの助力を（神に）懇願した。そこで祗は（軍営に）幕をはりめぐらせ、神を迎えて物見やぐらの上に奉置した。神は人には姿は見えないが、人間と会話をかわすことは可能であつた。三日後に（神は）別れを告げて祗に語つた、「八月十三日に賊の奴抄をうち破るはずである」と。果たしてその日、（賊軍が）余姚に進撃して来た。（しかし）賊船は水際に着いたものの、賊兵たちはぬかるみに足をとられて、皆酔つたようになりついえてしまつた。官軍は賊兵の全員を捕えて縛りあげ、それはきわめて容易であつた。蕭祗はその不思議なでき事を上奏し、（梁の）武帝は使者をさしむけて鮑郎廟の建物を増築し（謝意をあらわし）た。そして廟への参拝者はますます増加した。……

以上が『乾道四明圖經』の記述であるが、その書が成つ

てからおよそ半世紀後に編まれた『寶慶四明志』にもほぼ同様の記述があるので、鮑蓋すなわち鮑郎神は、奴抄という匪賊の蜂起に対して、神助をあらわして政府軍を助け、時の皇帝である武帝から廟の増築について援助を受けたという伝承が、その神の本貫の地である明州地域に永らく保存されていたことに疑問の余地はない。そして『寶慶會稽續志』に、大通以来靈応ますますあらわれた、と述べられていたのは、実はこの挿話のことをさしていたのではないかと考えられる。要するに、鮑郎神鮑蓋の故郷である明州はともかく、いささか距離のへだたりまたなじみも薄い紹興においては、そうした伝承はいつの間にか人々の記憶から失われてしまっており、それが誤解を生じる原因となったのではなからうか。

## 五

ここでひとつ訂正しなければならぬことがある。筆者は前稿において、海塩県の方志のうち現在日本国内で閲覧可能なものは、明末に編まれた『海鹽縣圖經』十六卷、清代の『海鹽縣續圖經』七卷、ならびに清末に編纂された『海鹽縣志』二十一卷の三種だけしかない、と述べたがそれは正しくない。と言うのはそれらよりはるかに古いものが存在す

るからで、その書とはすなわち南宋代に編まれた『漱水誌』である。

『漱水誌』も八巻、常案字は召仲の撰、現在に伝わっているのは二巻のみ。南宋の紹定三年(一二三〇)付の羅叔韶の序文が残っている。本書の特色は、書題からもうかがえるように、単なる海塩県の県志にあらざるして、海塩県澈浦鎮の鎮志であることで、永らく「鎮志の濫觴、地乗の典型」と讃えられ、後世の鎮志に多大の影響を与えた、名声たかいものである。撰者の常案についてはあまり明らかではないが、その地に移り住んだ文人であつたらしい。本書には幾つかの版本があるが、現在では『叢書集成初編』や『宋元方志叢刊』に収録されており、希覯本ではない。よつて誠に不明であつたことを慙愧しつつ、ここに改めて訂正させていただく。

さて、現行の『漱水誌』を調べてみても、残念ながら前稿を訂正すべき記述は基本的にはない。地理門の沿革の項に鮑郎塩場の地名が見えること、戸口がその当時五千戸程あつたらしいことが知られるものの、南宋代からすれば比較的時代の近い、唐宋の黄巢の乱(八七五—八八四)の際の混乱等に関しては、記憶が生々しいせいはいろいろ伝えられているが、それよりずっと以前の八百年以上も昔に起きた孫恩の反乱のこととなると、いつの間にかほとんど



忘れ去られてしまつたらしく、鮑郎浦の地名のいわれとして『南史』の鮑嗣之戦死の記述を引くのみで、もとより曇鸞の名前などどこにも見出せない。

同じく寺廟門には、鎮内の幾つかの寺廟についてその縁起が紹介されてはいるが、いずれも比較的新しいものばかりで、唐代以前にさかのぼり得る歴史の伝えられている寺廟は全く存在しない。その点に関しては古跡門に列挙されている古跡も同様で、地域の歴史を考えたならそのような筈はあり得ないのであるが、このあたりは唐宋の頃に余程の被害を受けて、住民も変りそれ以前の記録や記憶がほぼ完全に失われてしまつたのではないかと考えられる。

最後に今一度筆者の鮑郎子神鮑嗣之説について整理しておきたい。その第一の理由は、曇鸞からはいささか時代がへだたるものの、南宋の頃には鮑郎塩場が既に存在していたことが確認でき、その塩場の地名は鮑陋の子鮑嗣之の戦没地であつたことに由来するのは間違いないと考えられること。第二に、鮑嗣之についてはともかく、その父の鮑陋に関しては『宋書』<sup>(28)</sup>『南史』<sup>(29)</sup>及び『水經注』<sup>(30)</sup>の記載により実在の人物であつたと認められ、孫恩の乱の頃に海塩令であつたことは確かであること。第三に、道宣が呉興一円をめくつて資料を搜集した貞観の頃にはまだ、浙江地方に鮑郎子神は二十歳ぐらいの若武者であつたとの伝承が残されていた

と思われ、その年齢が戦死した鮑嗣之にはほぼ一致するのではないかと考えられること。第四に、海塩は会稽に比べれば単なる小邑に過ぎないことは事実であるが、小さいながらも天然の良港に恵まれており、もし曇鸞が杭州湾を水路で横断しようとしたのであるとするなら、そのあたりから乗船しようとした可能性は大きいこと。第五に曇鸞との挿話からすると、鮑郎子神はその当時あくまでも航海神としてまつられていたらしいが、それは鮑郎塩場付近の地理的な条件も重なつて、次第に本来の姿を忘れられ、いつしか水神あるいは航海神であると解釈されるようになったとするなら、一応説明が可能であること。以上の理由から筆者は、現在においても、前稿で論じた鮑嗣之説に固執する次第である。

曇鸞が乗船してむかおうとした目的地は今なお明らかではないが、もし明州であつたとしたなら、先にふれたとおりその周辺には、後漢時代に創建されたと伝えられる呉越地域では最古の寺院である靈山寺(現、保国寺)、西晋時代に建立され後に柴西や道元が修行したことで知られる天童寺、東晋時代の創建で梁の武帝とも関係がふかく、インドからもたらされた仏舍利塔が収められており、かつて陶弘景が参詣し五大戒を授けられたと伝えられている阿育王寺など、仏教寺院の数はすくなくない。

そのような次第で、筆者は現在の時点ではあくまでも、鮑郎子神とは東晋の隆安五年（四〇一）三月ころに、孫恩一派の反乱軍との戦闘に際して、後の海塩県鮑郎市付近において、武運つたなく戦死した、当時の海塩令鮑陋の子の鮑嗣之であると考えている。ただ残念ながら筆者のわずかの調査では、今までのところ海塩県付近に鮑嗣之をまつた鮑郎子神廟が存在したという記録はどこにも見出し得ていない。しかしその点に関しては、前稿でも述べたように、そのあたりのどこかにはかつて鮑郎子神廟が存在したが、唐代中期以降遅くとも唐末五代の戦乱の時期までの間に、破壊されてその後は再び復興されることはなかった、と考えれば一応の説明はつく。

地域神信仰という視点から考えれば、時代の変化にとともに忘れて去られる神があるのは当然のことである。疊鸞の時代には一応安定期に入っていたとはいえず、江南の各地には古い伝統的な地域神信仰が残っていたと考えられ、異民族の定住と支配により社会のあり方そのものが大きく変化した華北とくらべて良く言えば信仰のあついで、率直なところ湿潤なアニミズムの要素をも濃厚に含んだ地域であった。邪祠淫祠と言われながらも、人を神としてまつる風習が根強く残った重層信仰の土地において、郷土の人々から愛惜されていた歴史の浅い若い神、それが孫恩の大反乱に

奮戦むなく戦死した若武者鮑嗣之であり、彼はその折に戦死した海塩出身の呉兵のいわば代表的な存在としてまつられていたと考えられる。

疊鸞と鮑郎子神の接触と神助の説話は、そのような挿話があつたと信じたい、地元の人々の願望のあらわれであつたとも解釈できよう。そして道宣が自身の一族の出身地でもある浙江の地において採集したのは、その地域で永く誇らし気に語り継がれて来た、高僧と地域神との関わりを伝える伝承であり、土地の人々にとってはそれも彼等の歴史の一部分となつており、地域神が国家権力による認承を与えられることは、地元の信奉者たちの永い間の悲願であつたのではなからうか。

疊鸞の立場からすれば江南への遊学は、不老長生の術にも心ひかれてという、いささか不純な動機にもとづくところもあつたことは事実であろう。しかし水と緑の豊かなおだやかな江南の風土と風物に接し、長い遍歴の旅とりわけ船の旅を体験したことが、いつしか精神の失調を回復させ心を癒すとともに、その後の疊鸞の思索と著述に深みと色どりを与えたことは間違いない。そしてその後再び故郷の華北に還つた疊鸞は、洛陽において菩提流支 (Bodhiruci) と運命的な出会いをすることになるのである。

以上、鮑蓋とその周辺について検討するとともに鮑郎子

神についても再考を試み、前稿で論じたように、やはり鮑嗣之こそが鮑郎子神ではなかったかとの結論に達したが、いまだにその廟の所在すら確認できず、その意味で残された課題はすくなくないと言わねばならない。ともあれ、それらについては近い将来改めて考えることとして、大方の御叱正をお願いする次第である。

## 註

- (1) 宋沙蔭著、滋野井恬、桂華淳祥訳『浄土古刹玄中寺』（東本願寺出版部、一九九〇）。原著は訳書と同書名、北京、中国展望出版社、一九八五刊。
  - (2) 藤堂恭俊『曇鸞』（『浄土仏教の思想』第四卷所収、講談社、一九九五）。
  - (3) 論註研究会編『曇鸞の世界―往生論註の基礎的研究―』（永田文昌堂、一九九六）。
  - (4) Hisao Inagaki, *T'an-Luan's Commentary on Vasubandhu's Discourse on the Pure Land: A Study and Translation*. Kyoto: Nagata Bunshodo, 1998.
  - (5) 藤善真澄「曇鸞大師生卒年新考―道宣律師の遊方を手がかりに―」（『教学研究所紀要』第一号、一九九二）。
- 同「曇鸞教団―地域・構成―」（前註）(3) 引く『曇鸞の世界―往生論註の基礎的研究―』所収。
- 同「曇鸞と『往生論註』の彼方」（『教学研究所紀要』第六号、一九九七）。

(6) 拙稿「仙人子安のこと」（『日本中国学会報』32号、一九八一）、のち拙著『月と橋 中国の社会と民俗』（平凡社、一九九五）所収。

同「禁呪と木瓜―論註所引外典考―」（前註）(3) 引く『曇鸞の世界―往生論註の基礎的研究―』所収、一九九六。

同「鮑郎子神考―曇鸞と神異―」（古田敏一教授頌寿記念中国学論集、汲古書院、一九九七）所収。

同「曇鸞と仙經」（北畠典生博士古稀記念論文集『日本仏教文化論叢』下巻、所収。永田文昌堂、一九九八）。

(7) 道宣一統高僧伝」巻六、義解篇（『大正藏経』第50巻、史伝部、所収）。なお引用部冒頭の「還」字を「還る」と読まないことについては、前註（5）引く藤善「曇鸞と『往生論註』の彼方」参照。

(8) 前註（6）引く「鮑郎子神考―曇鸞と神異―」。

(9) 鮑郎子神鮑靚説の代表的なものとしては、藤野立然「浄土論注と外典との交渉」（『宗学院論輯』35、一九四二）がある。

(10) 鮑郎子神鮑君神説に関しては、前註（2）引く藤堂恭俊『曇鸞』参照。

(11) 『説史方輿紀要』巻九一、浙江省海塩県。

(12) 前註（5）引く藤善「曇鸞と『往生論註』の彼方」。

(13) 嘉泰元年（一一〇一）修『嘉泰会稽志』巻六、祠廟。【宋元方志叢刊】（中華書局、一九九〇）所収。

(14) 宝慶元年（一二二五）修『宝慶会稽統志』巻三、祠廟。【宋元方志叢刊】（中華書局、一九九〇）所収。

- (15) 豊稷の伝記は『宋史』卷三二二にあり。彼もまた鄧の出  
身であった。
- (16) 会稽(紹興)の歴史については、前掲『嘉泰会稽志』『宝  
慶会稽統志』及び『訖史方輿紀要』参照。
- (17) 前註(14)引く『宝慶会稽統志』卷三。
- (18) 明州のことに關しては、前註(11)引く『訖史方輿紀要』  
卷九二、浙江省寧波府。
- (19) 四明六志のことにについては『中国地方志詞典』(黄山書  
社、一九八六)参照。
- (20) 乾道五年(一一六九)修『乾道四明図経』卷一、祠廟。『宋  
元方志叢刊』(中華書局、一九九〇)所収。
- (21) 蕭祗の伝は『南史』卷五三、『北齊書』卷三三、に見ゆ。
- (22) 宝慶三年(一二二七)修『宝慶四明志』卷十一、叙祠。『宋  
元方志叢刊』(中華書局、一九九〇)所収。
- (23) 天啓二年(一六二二)修、乾隆十三年(二七四八)重刊  
『海塩県図経』十六卷。東洋文庫蔵。
- (24) 乾隆十三年(二七四八)刊『海塩県統図経』七卷。東洋  
文庫蔵。
- (25) 光緒三年(一八七七)刊『海塩県志』首末各一卷、二十  
二卷。東洋文庫蔵。
- (26) 紹定三年(一二三〇)序『澉水志』二卷。『宋元方志叢刊』  
(中華書局、一九九〇)及び『叢書集成新編』第95冊、所収。
- (27) 前註(19)引く『中国地方志詞典』。
- (28) 『宋書』卷一、武帝本紀上。
- (29) 『南史』卷一、宋本紀上。
- (30) 『水経注』卷三三、江水、魚復県の項に、  
益州刺史鮑陋鎮此、爲譙道福所圍。  
とあることから、後に鮑陋が益州刺史に任ぜられていたこ  
とは間違いない。
- (31) 道宣の家系と出自そして江南における史料搜集につい  
ては、前註(5)引く藤善「曇鸞大師生卒年新考—道宣律師  
の遊方を手がかりに—」及び、同「道宣の出自をめぐって  
—吳興の錢氏—」(『仏教史学研究』二八—二九、一九八六)参照。  
なお鮑郎子神の年齢は、前註(7)引く曇鸞伝中の「状如二  
十」にもとづく。
- (32) 海塩が杭州湾口において古来重要な位置にあり、かなり  
以前から会稽との間に航路が開かれていた可能性の大きい  
ことについては、前註(23)引く『海塩県図経』及び前註(5)  
引く藤善「曇鸞と『往生論註』の彼方」参照。
- (33) 陶弘景の阿育王塔参拝と受戒については、妻谷邦夫「陶  
弘景年譜考略(下)」(『東方宗教』48号、一九七六)が詳細  
であり、それによれば、天監十二年(五一三)弘景五十八歳  
の時に鄧県の阿育王寺に詣でたとのこと。